4年後へ その先へ

パネルディスカッション

共に自由にスポーツを マセソン

進行役 藤田紀昭（ふじた もとあき）さん
日本福祉大教授

高橋道和（たかはし みちやす）さん
スポーツ庁次長

真野嘉久（まの よしひさ）さん
シッティングバレー女子日本代表監督

マセソン美季（みき）さん
元アイススレッジスピードレース選手

藤田（進行役） 日本とカナダのバリアフリーの違いは。

マセソン 障害者を取り巻くまちづくりが進んでいるなと思います。マセソン たまに日本に帰ってくると、障害者を配慮されることが多い。カナダでエレベーターを待っているとき、「私が先頭で待っているから、どうぞ」と乗せていただくことが多い。日本では、我先へ、私の前にわって、先に行った者勝ちという感じ。2020年に向けて、外国からお客さまをお迎えするにあたって、少し考えた方がいい。

藤田 スポーツで進いる感じることは。

マセソン 身近にスポーツができるところがカナダにはすごくたくさんある。私が住んでいるオタワは、冬のスポーツが盛ん。子どもたちを連れてホッケーをしに行こうというときに、子どもたちはホッケーシューズを、私はスレッジというものを持って、一緒に向かう。日本で同じようなことをすると、こちらでは前例がありませんね、安全が確保できませんね、と止められて、諦めてしまう。日本では、計画的に授業をされている学校は変わってきていると思う。

藤田 真野さんはシッティングバレーボールの体験教室を学校で実施されている。やる前とやった後で、子どもたちに変化はあるか。

真野 年に40校くらいを回っているが、反応はとてもいい。やはり、一緒にやれるということがとてもうれしいようだ。

藤田 8年くらいされているそうだが、最初と今と、学校の状況はどうか。

真野 先生は「障害者はかわいそうだ」「頑張って一緒にやろう」という人が以前は多かった。今は少しずつ変わっている。けれど、単発で終わる学校はあまり変わらない。今年も来年も再来年と、計画的に授業をされている学校は変わってきていると思う。

マセソン カナダでは車いすでもたくさんのことができて、ソフトボールの授業などたくさんのソフトボールが行われている。先生がそのときに「何々ちゃんが一緒にやるためには、どういうふうにしたらいいと思いますか」と問いかける。何々ちゃんは走ることができないから、打ったら、誰かが代走を立ててもいいよ、というふうに、ルールを変えていく。

真野 シッティングバレーは、健常者も障害者と一緒にできるスポーツ。授業の中にたまたま障害のある子どもがいて、「じゃあ、シッティングバレーと普通のバレーのどっちを選ぶか」ということが考えられるような教育システムがあれば、見学で寂しい思いをする子どもはいないはずだ。

藤田 文部科学省で長くおられた高橋さん、スポーツ庁での取り組みを含めてお話を。

高橋 20年から実施される新しい学習指導要領の見直しの議論の中で、障害のある方への理解を図るための、バリアフリーという考え方を、道徳だけではなく、音楽や、図工、美術、体育などいろいろな教科で取り入れることを話し合っている。それを教える先生が非常に大事なので、教員養成の課程、教員になった後の研修、免許更新の中に、心のバリアフリーの指導や教員のコミュニケーションのあり方を入れるべきではないかと、いろいろ方向で議論が進んでいる。

スポーツ庁としては、スポーツを通じた心のバリアフリーを普及させることが大切な

考えさせる教育進めて 真野

マセソン 課題、障害のある方とない方が共に自由にスポーツをすることが、カナダでは、ごく当たり前のことになっている。やはり、障害者の方がいろいろなことをやっていくことが、社会の強みになっていくのだと思う。

藤田 障害のある人とない人のバリアを、なくしていく教育に向けての提案を。

マセソン 障害のある人とない人が一緒にスポーツをやっていくことが、道徳だけではなく、音楽や、図工、美術、体育などいろいろな教科で取り入れることを話し合っている。それを教える先生が非常に大事なので、教員養成の課程、教員になった後の研修、免許更新の中に、心のバリアフリーの指導や教員のコミュニケーションのあり方を入れるべきではないかと、いろいろ方向で議論が進んでいる。

スポーツ庁としては、スポーツを通じた心のバリアフリーを普及させることが大切な

官民あげて成長産業に 高橋

藤田 企業がビジネスとして障害者スポーツに取り組んでいくことで、さらに共生社会へのスピードがアップしていくのは。

高橋 これから自覚を挙げて取り組む戦略プロジェクト10の一つは、スポーツを成長産業としていくこと。当然、障害者スポーツにも、その芽が十分あると思っている。

バラリンピックも最大は観客性が非常に高まって、国際的にも注目されつつあるといった状況。

藤田 東京パラリンピックまでにやりたいことを。

高橋 国はスポーツ庁にオリンピックとパラリンピックの所管を一本化したが、自治体で一本化したのは、47都道府県のうちの1つにとどまっている。今後、各自治体で一本化する方向を後押ししたいと思っている。

真野 我々は必死に強化もしなければいけない。普及もしなければいけない。国民の皆さんに受け入れられる障がい者スポーツとなれるように努力したい。

藤田 現在、国際パラリンピック委員会は日本パラリンピック委員会が同じ、パラリンピック競技の教材づくりを行っている。100%の生徒が「シッティングバレーを知っているよ」と手を挙げられるようになるといいなと思っている。

備の開発競争が激しくなる。障害者スポーツに取り組んでいくことで、さらに共生社会へのスピードがアップしていくのは。

高橋 国はスポーツ庁にオリンピックとパラリンピックの所管を一本化したが、自治体で一本化したのは、47都道府県のうちの1つにとどまっている。今後、各自治体で一本化する方向を後押ししたいと思っている。

真野 我々は必死に強化もしなければいけない。普及もしなければいけない。国民の皆さんに受け入れられる障がい者スポーツとなれるように努力したい。

藤田 現在、国際パラリンピック委員会は日本パラリンピック委員会が同じ、パラリンピック競技の教材づくりを行っている。100%の生徒が「シッティングバレーを知っているよ」と手を挙げられるようになるといいなと思っている。

心のバリアフリー 学校現場で

記念講演

前五輪担当相 遠藤利明さん

東京オリンピック・パラリンピックの大きな意義に、ユニバーサル社会の実現がある。政府として、ユニバーサルデザインの関係省庁の連絡会議をつくった。大会組織委員会や東京都、各省庁の連携を進めていく、会議では、心のバリアフリーを進めていこうとなった。一番大事なのは学校教育で、授業の中に入れてもらう。先生方の免許更新などの時にも、心のバリアフリーの教育に取り組んでほしいとお願いしている。

2020年大会後の日本が世界で一番ユニバーサルデザイン進んだ国になるよう、取り組んでいく。

◆この特集は、斉藤寛子、坂本進、友野賢司、長谷川智、森本義紀、追和義写真が担当しました。朝日新聞デジタルで詳細をお伝えします。

気軽に搭乗できる環境づくり

JALスカイ羽田事業所業務部
国内パッセンジャーサービス業務グループ
中田智子さん

JALグループは、お体の不自由なお客様をプライオリティーゲストと呼び、プライオリティーゲストセンターで搭乗に関する相談を受け付けている。センターは1994年に開設され、お客様の状況や要望を聞き、各空港担当者と情報を共有している。

プライオリティーゲストの搭乗手続きはグラウンドスタッフが行い、ご要望により搭乗口まで案内している。設置空港は限られているが、スマイルサポートカウンター＝写真、JAL提供＝では搭乗手続きを座ったまま行うことができる。

補助犬利用者を招いた搭乗体験ツアーや特別支援学校向けの空港見学を実施するなど、幅広い活動を行っている。あらゆる利用者にもっと飛行機を身近に感じてもらうため、航空会社社員は机上での知識のみならず、プライオリティーゲストへの理解を深める必要がある。気軽に搭乗できる環境づくりが重要だと感じている。

選手を採用 2人が日本代表に

三菱電機営業本部東京オリンピック・パラリンピック推進部次長
小峰即彦さん

当社は20年度に創立100周年を迎える。オリンピックの年にどう貢献できるか東京都などに聞いたところ、パラリンピックの成功や共生社会の実現という声が多く、それに沿って取り組んでいる。

アスリート採用をした。6人採用し、パラリンピックのアーチェリー、オリンピックのシンクロナイズド・スイミングの2人が代表に選ばれた。

車いすバスケを体験する子どもたち＝三菱電機提供

日本障がい者スポーツ協会とのオフィシャルパートナー契約、日本車椅子バスケットボール連盟と協賛契約を締結している。神奈川・大船の体育館をパリアフリー化し、車いすバスケの練習場所に使ってもらっている。

今後の取り組みは、グループ会社を含め、13万5千人の社員に障害者スポーツを知ってもらうこと。車いすバスケの体験や、心のバリアフリー教育、大会ボランティアを考えている。

日本の挑戦を、サポートするという誇り。
NOMURA
野村ホールディングスは、東京2020オリンピック・パラリンピックを応援しています。
TOKYO 2020 TOKYO 2020
東京2020ゴールド部門パートナー

広げよう、ユニバーサル社会

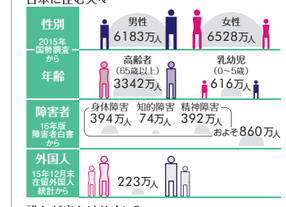
共生社会めざして

2020年開催の東京五輪・パラリンピックに向け、「共生社会」の実現について考えよう。そんな狙いの朝日新聞2020シンポジウム「広げよう、ユニバーサル社会」（朝日新聞社主催、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会、日本財団パラリンピックサポートセンター協力）が7月23日、東京都港区の東京ミッドタウンであり、約300人が耳を傾けた。

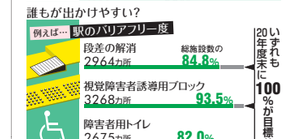
ユニバーサル社会 Universal Society

性別、年齢、障害の有無、国籍などにかかわらず、誰もが暮らしやすい社会

日本に住む人々



誰もが出かけやすい?



国交省の資料から。14年度末現在。1日当たりの平均的な利用者が3千人以上。バリアフリー法に基づく基準に適合しているもの

参考サイト 内閣府「バリアフリー関連情報 ぷらっとホーム」http://www8.cao.go.jp/souki/barrier-free/link/plat.html
自治体や交通機関のバリアフリー情報、使いやすく配慮された生活用品の情報などを掲載

障害者のスポーツ活動を広げるには

スポーツ庁の報告書「地域における障害者スポーツの普及促進について」から

バリアーは価値 強みに変える

講演

ミライロ社長・垣内俊哉さん

「バリアバリュー」について話したい。バリアバリューは、バリアー（障害）をバリュー（価値）へ変えていくことを志した言葉で、私の会社「ミライロ」の企業理念だ。

バリアフリーという言葉は、バリアーをフリー（取り除く）ということで、マイナスをゼロにしていこうという考え方、でもマイナスをゼロにしていこうとするアプローチは、障害はなければいいもの、というネガティブなものだと思う。

私は20年以上、車いすに乗って生活してきた。ひとたび外へ出ると、こう言葉をかけられる。「頑張ってください」「大変ですね。私が何をしているかも知らないはずなのに、障害があることはハンディキャップである、マイナスだ、不幸だ、かわいそうだ、と。だが、果たしてそうかといえば、そうではない。

私は骨が弱く、折れやすいという「魔法」にかけられて生まれてきた。骨折は20回以上、手術も数回、入生の5分の1は病室で過ごした。例えば小学校のとき、運動会や遠足、修学旅行へ行けなかった。

「歩けたら」「車いすでなければ」「普通だったら」。そんな思いが募り続け、高校を中退して、手術とリハビリに励みが、かなわなかった。17歳のとき、9度にわたって自分命を絶とうとした。病院の屋上から飛びおりようとしたが、立つことすら、歩くことすらままならなかったので、飛び降りることもできなかった。

死ぬことすらできない中、「これからどう生きていくべきか」を考えた結果、歩けなくても幸せを探さなければいけないと思いついた。「歩けないからこそ、できることもある」と気づいた。

人生を振り返り、改めて思う。障害はハンディなのか、マイナスなのか、不幸なのか、私は声を大にして言える。障害は、ないほうがいいに決まっている。それでも、歩けなかったからこそ出会えた人がいた。得られた気づき、学びもあった。必ずしも、ときに障害がプラスに、強みに、価値に変わる瞬間があった。バリアーをバリューとしていくことも大切だ。障害を「つの強みに変えていこうという思いを持つことが大切だ。

日本は他国に類を見ない速度で高齢化が進む。だからこそ、日本はユニバーサルデザインと言葉に出されなくても、国民一人一人と向き合う必要がある。提供すべき相手の方何を求めているのか、それを正確に理解する、聞くことが必要となってくる。

一人ひとりと向き合って 選択肢提供を

講演するミライロ社長の垣内さん

ハートは今すぐ変えられる。これからの社会で求められてくるハートのあり方として、ユニバーサルマナーという考え方がある。自分とは違う理解のことに手助けもしたい。例えば、オリンピック・パラリンピックもあえて「障害者と向き合う機会も増えている。「できたら、ちょっとかっこいいおねーさくらいのマナーにしていかなければならない。

障害者や高齢者に対して、私たち は二極化しがちだ。無関心と過剰。どちらも悪いことではない。本来あるべきは、適切ではない。「過剰」。どちらも悪いことではない。きりだけは心配ができる人人。

・企業がお求められてくる。

例えばテーブルというものがある。車いすの私に気づくと、役所や厳機関、交通機関、飲食店のかがいすをどけて、「こちらへどうぞ」と案内してくれる。この対応は正解かも、不正解かも、どちらなにえは、この対応は不正解だ。

車いすに乗っている方でも、いすに移りたいという方が多いる。特に高齢の方に多い。

いすに移りたいという方が多くなっている。暑い時期は、車いすにすたい。暑い時期は、車いすにすくなっている。

本来はいすをとびはるより先に、車いすのままお食事をなさいますか、それとも、いすに移られますか、と聞く必要がある。

みんな、思っていること、望んでいることはそれぞれ違う。十人十色だ。だからこそ、何となく向きあうのではなく、目の前の方、一人一人と向き合う必要がある。提供すべき相手の方何を求めているのか、それを正確に理解する、聞くことが必要となってくる。

企業の取り組み

車いす・杖で楽しめる旅を

クラブツーリズムテーマ旅行部
ユニバーサルデザイン旅行センター課長
渕山知弘さん

車いすや杖の方も楽しめる旅を19年前から続けてきた。昨年5月にはリフトつきバス＝写真、同社提供＝を大手旅行会社で初めて導入した。行きたいという希望をかなえる旅を組み立てている。

11年9月、震災半年後の宮城・松島に車いすや視覚障害者の方のツアーをした。喜ばれたのは温泉の大浴場での入浴だった。脳梗塞で要介護5の男性が夫妻でハワイに行った。金婚式をぜひハワイでと思い、2年間、リハビリを頑張り、無事に挙げた。ベルーのマチュピチュでは1台の車いすに3～4人の現地係員をつけた。東京・浅草の人力車屋に提案し、車いすの方も乗れる人力車を作った。

視覚障害者向けの旅行もある。大英博物館で実際の展示物を触ってもらった。栃木県にあるホンダの「ツインリンクもてぎ」では視覚障害者の方も車を運転できる。過去9回、130人の方が体験した。

性的少数者 理解広がれば

野村HDグループ広報・CSR担当兼
東京オリンピック・パラリンピック推進担当
執行役員
池田肇さん

野村ホールディングスは約2万9千人の社員がいて、国籍は70カ国に及ぶ。

弊社の倫理規定の中に人権の尊重がある。そこに、性的指向、性同一性というものが2012年から追加された。LGBT（性的少数者）、最近はLGBTAと言っているが、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル（両性愛）、（心と体の性が一致しないなどの）トランスジェンダー、そして、LGBTを支援する「アライ（Ally）」というメンバーのことだ。そういう活動が広がってくると、LGBTは特殊なものではないという理解が醸成されていく。

シッティングバレーを体験する社員ら＝野村HD提供

去年からシッティングバレーボールの競技をサポートしている。私も、障害者スポーツの体験会に参加したり、練習に参加したりしているが、同じ体験をすることで、障害者の方に対する感覚が変わった。